

ドイツ語学を学ぼうとする人のために

— 2冊の入門書紹介

室井 禎 之

乙政 潤 著

「入門ドイツ語学研究」大学書林 2001 年刊 (2900 円+消費税)

吉田光演・保阪靖人・岡本順治・野村泰幸・小川暁夫 共著

「現代ドイツ言語学入門」大修館書店 2001 年刊 (2500 円+消費税)

2001 年の秋、「入門」と銘打ったドイツ語学に関する 2 冊の本が、日本人の著者によって出版された。日本におけるドイツ語学人口は必ずしも多くはない。大部分のドイツ語学専攻者が加入していると思われる「ドイツ文法理論研究会」の会員数は機関誌『エネルゲイア』27号(2002)の会員名簿をみるとおよそ 250 名である。また、ゲルマニスティクを専攻する学生・院生のあいだでも語学を主たる関心領域にしている者は文学に比べると格段に少ない。ありていにいえば、ドイツ語学はあまり人気のない分野である。このような状況の中で 2 冊の入門書があいついで出版されたのはとても喜ばしいことである。というのも、そのとっつきにくさにもこうした不人気の一端があると考えられるからである。

これまでは、ドイツ語学の日本語で読める概説書として講義の参考文献として紹介できるものといえば、イギリス人 A. フォックスによるそれ(福本義憲訳「ドイツ語の構造」三省堂)がほとんど唯一のものであり、しかも絶版になってしまっている。日本人の手による、日本人の学生を主な読者と想定して書かれた入門書によってそれが少しでも緩和され、ドイツ語を言語学的に見るといふことに興味を惹かれる人が一人でも増えることを期待したい。

言語学は読んで字のごとく言語を研究対象とする学問であるが、ソーシャルの指摘をまつまでもなく、ことばにかかわるありとあらゆる事象のうちから何をその固有の対象とし、それをどのような視点から見るといふについてはさまざまな可能性がある。とりわけ言語はわれわれの認識や思考と密接に結びついているため、それから距離をおいて意識化することが難しい。また、言語についての省察も言語によって行わなければならない、対象と説明装置が同一のものとならざるをえないという論理的困難を抱えている。それゆえ、分析のための視点と方法はよく考え抜かれたものでなければならないのである。その習熟のためには一定の時間と忍耐を必要とする。さらにいえばその結果として、傍目から見ると、概念操作に精を出し、ことばをいじくりまわしているだけ、という印象が生ずるのもやむをえないことかもしれない。

言語学は言語の構造や規則を扱う。ふつうわれわれはことばを使うとき、そのようなことには頓着せずに、言い表すべきことをどうことばで表現するか、ことばで表現されたものをどう解釈するか、を問題にする。関心は個別的で具体的な側面に集中し、それを支えている一般的で抽象的な側面が問われることは、まずない。このこともまた、言語学を縁遠く思わせる一因となっているのかもしれない。しかし、心に染み入るような美しい文章も、深遠な思想も、ふだん人々が口にして日常的な言語と同じ構造と規則を用いて組み立てられている。そしてそのしくみを解明しようとする言語研究の成果は、人文科学のさまざまな分野で注目され、大きな影響力をもって応用されていることは周知の事実である。構造主義、発話行為理論、談話分析、プロトタイプ理論などということばを聞いたことのない人はほとんどいないだろう。ドイツの文化に広く関心を持つ人たちにドイツ語を言語学的に見るとはどういうことかについて、一定の理解を提供してくれるものとして標記の2冊を紹介したい。

同じく「入門」を標榜してはいても、ここに紹介する2冊は基本的な構想をまったく異にしている。

乙政「入門ドイツ語学研究」は表紙のドイツ語タイトルに „Einführung in die germanistische Linguistik“ とあることに端的に示されているように、ドイツ(言)語学(Germanistische Linguistik)という確立された(と通例みなされている)領域を対象としている概説書である。伝統的なやり方にしたがって、本書は言語の最小の単位である音を扱う音声学・音韻論に始まり、形態論、統語論、と順により大きな単位を扱っていく。ただし、本書の特徴は、言語の構造、すなわち言語を静的に記述・説明する諸分野・アプローチばかりでなく、言語のダイナミズムが強く関わる分野・アプローチにも前者と同様の(ひょっとしたらそれ以上の)力点をおいていることである。

本書は12章よりなるが、第1章「言語考察のレベルと局面」は序論的な導入部である。そして第2章「音韻論」(ここには音声学も含まれる)、第3章「形態論」、第4章「統語論」、第5章「意味論」と続く。意味論に辞書に関する節(VIII, IX)が含まれているのは注目に値する。第6章「テキスト言語学」で最大の言語単位に行き着く。さらには、第7章「記号論」、第8章「語用論的言語学」、第9章「コミュニケーション」、第10章「社会言語学」が加わり、狭義の言語学にとどまらない、より広い視野からドイツ語を見る企てが行われている。第11章「言語の定義」、第12章「ドイツ言語学とゲルマニスティク」はそれぞれごく短い章だが、ある意味で著者の構想をもっとも雄弁に語っているところかもしれない。巻末には設問の解答例、参考文献、索引が掲載されている。

本書の構想は明確な方針の下に貫かれているように見える。はっきりとした目標設定がなされ、それにあわせて叙述がなされていると考えられるのである。大学でゲルマニスティクを専攻する学生が、言語学の知識をもっていなくとも、ドイツ語についてさまざまな角度から観察し、あれこれ思いをめぐらせることができるようになることをめざし、そのためにいくつもの工夫がなされている。これは著者の長年にわたる教育活動に裏づけら

れているものに違いない。いくつか例を挙げると：

- 練習問題が極めて豊富である。設問は106を数え(悩み多き言語学なれば108という数字を考えてもよかった?)、解答例だけで30ページにもなる。全体で200ページ弱の本にしてはかなり思い切った量であろう。その分本文量が制約されるわけだが、細部の説明よりは読者自ら考えることを優先させたものと思われる。
- 「意味論」に辞書に関する記述が見られる。おおかたの学生にとってもっとも身近なことばについての書物は辞書である。そして一見何の問題もなさそうな見出し語の挙げ方の議論を通じて、ことばを扱う際に求められる態度が自然な形で提示されている。Dudenの12巻の辞書についても、簡単な説明と実際にそれを使ってみる設問が組み合わされ、実践の中でことばへアプローチする方法が会得されるようになっている。
- 最後の2章は異色である。言語には語や文のように、誰もが知っている、また言語の基本的な構成体であるにもかかわらず、いざ定義しようとするそれがほとんど不可能であるようなものがいくつもある。言語自身もそうであり、先に述べたように言語学はその対象設定に関していまだに決定的なものをもっていない。「言語の定義」と題された章の存在はそれだけに興味深い。とはいってもここで明快な答えが用意されているわけではない。2ページばかりのなかでいくつかの提案が示されているのみである。
- 最終章はゲルマニスティクの概観に充てられている。これも極めてラフなスケッチであるが、ドイツ語学研究の位置付けを記す文章が不可欠であると考えられたに違いない。

総じて本書には、ドイツ語学に始めて触れる人に対してそのさわりを提示しようという姿勢が強く感じられる。また、「言語とは何か?」「ドイツ研究の中でどう位置づけられるのか?」といった、実は根本的ではあるが、すでに専門の世界に入っている人間にとってはあまり問題にならない(あるいはしたくない)ような問いから逃げないのもこの姿勢の一環であろう。

評者はこうした姿勢を高く評価するものであるが、しかし手放して喜んでいるわけではない。量的な制約があったものと推察するが、個々の項目についての説明はしばしば突っ込み不足の感を禁じ得ない。確かにすべての問題について委曲を尽くした議論を展開することは不可能であろうし、また入門書の役割を大きく越えてしまうことになるだろう。とはいいいながらも、言語学の面白さは言語現象の森の中に分け入り、一見錯綜している事実には秩序を与えて行くことにあり、また一面面白いと同時に一筋縄ではすまない厄介なところでもあるが一さまざまな秩序の与えかたが存することにある。あらゆるところに流動性が見られ、最終的な答えが必ずしも想定されないことばの世界を垣間見られるような章があれば画竜点睛となったのではないかと思考する。ということは、これをドイツ語学入門ないし概論の授業の教科書として使用すれば、教員の手によって適宜これを補うことができるだろう。

吉田他「現代ドイツ言語学入門」は全く対蹠的な構想のもとで作られている。書名にすでにそのことは表れているといえよう。タイトルを深読みするのはあまり評者の好むところではないが、伝統的な「ドイツ語学」でなく、あえて「ドイツ言語学」を採用したところに、ゲルマニスティクの一分野というよりは、人間の言語を扱う学問の一領域としての位置づけを重視している姿勢が見えていと映る。もっともこれは副題を見れば一目瞭然である。すなわち、「生成・認知・類型のアプローチ」はどれも個別言語の記述を越えて、言語一般の特性を探ろうとするものである。生成文法は統語論を中心にした探求をとおして人間の言語を生物学的に基礎づけられた生得の能力として同定しようとする試みであり、認知言語学は言語を人間の認知システムの一つの外的な現れとみなし両者の関わりを問うものであり、また類型論は多様な様相を示す諸言語をさまざまな観点から類別しそこに共通性を見出し、かつそれをとおして言語の個別性を照らし出そうとする。

本書は言語学の伝統的な下位区分である音声学・音韻論・形態論・統語論・意味論といった諸領域に等しく目を向けているわけではない。第1章に音韻・形態・統語・意味の諸部門に触れた節があるが、ごく簡単に位置づけを行っているだけで、ほとんどは統語(およびそれに関わる限りでの形態)と意味の現象を扱っている。

本書は6章222ページからなる。その概略は以下のとおりである：

- 第1章は「ドイツ言語学の現在」と称され、総論的な部分である。
- 第2章は「ドイツ語統語論の展開」と題され、生成文法の枠組みによる統語分析が紹介されている。80年代から90年代前半に展開され、統率・束縛(GB)理論としても知られる、原理とパラメーターの理論を用いており、その後のミニマリストアプローチは扱っていない。後者は前者を前提としているため、入門書としては当然の処置であろう。主として扱われているのはXバー理論による語順の説明である。名詞句や動詞句などの句(Phrase)の語順、定動詞第2位や3・4格の名詞句の順序などドイツ語に特徴的な語順が生じる手続きが手際よく示されているのを見ることができる。
- 第3章は「語彙と文の意味分析」で、主として項構造、意味役割、語彙概念構造、量化、作用域などの現代意味論における中心的な問題を扱っている。
- 第4章「認知言語論」では認知的アプローチの位置づけを行い、またいくつかの代表的認知言語論の手法を紹介しながら、空間認識と移動を言語がどのように扱っているかを論じている。
- 第5章は「ことばの獲得」である。言語習得は現在、言語理論を考えるうえできわめて重要な位置を与えられている。ここでは幼児によるドイツ語の習得に関して、原理とパラメーターの理論に基づいたいくつかの論点が紹介され、言語習得と言語理論の関係についての考察が展開されている。
- 第6章は「ドイツ語と言語類型論」と題された最終章で、類型論の特徴とトピックに簡単に触れた後で、いくつかの観点からドイツ語の特性を、日本語を含むさまざまな言語と比較対照しながら、論じている。

- 各章の終わりには「課題」と「読書案内」が付いている。課題の解答は掲載されていないが、前書きの最後に記されている Web サイトで見ることができる。読書案内は簡潔なコメントを付してあり、さらに深い探求を試みようとする者への道しるべとして役立つものと思われる。ただし、言語学の展開は人文系の学問としては急速であり、新たなトピックや考え方が数年の間隔で登場していることを考えれば、将来的には読書案内も Web サイトで更新されることを期待したい。
- 巻末には日・英・独の術語対照表、かなり詳しい参考文献一覧、そして索引が付く。

本書は概説書ではなく、理論に裏付けされた手法を用いて何をどのように明らかにすることができるか、に重点を置いている。そして現在の言語学は、ソシュールの言語体系のコンセプトによる構造言語学が言語の個性や言語間の差異を強調したのと対蹠的に、言語間の共通性や人間の言語に見られる普遍性の追及にその主たる関心を寄せている。(フンボルトの「一つの言語」のテーゼが想起される。)本書の構想はまさにこの潮流の上にある。とりわけ4章と6章において試みられているドイツ語と日本語との比較対照も、表面的な相違の確認の域を越えて、言語のメカニズムのなかに探りを入れる考察のありかたを示す恰好のケーススタディとなっている。日本語を母語とするものにとってこうした分析はまことに興味深いものである。ところで、外国語を学ぶ意義の一つは、彼我の比較をとおして我を外から眺めることができ、その相対化が可能となり、より広い精神的地平を享受する条件が生まれることにある。言語学の大きな功績の一つには、この効用を単なる印象からではなく、精緻な議論によって跡づけることができることがある。本書での関連する論述はこの線からも評価するに足るものであると評者は考える。

言語学の知識をほとんど持たない人にとって、入門書とはいえ本書は難しいものに映るかもしれない。まえがきに「味加減は少し濃厚だが」とあるのは著者たちの正直な態度表明である。しかし濃厚なのは味加減だけでなく、栄養成分をたっぷり含んだ濃厚さでもある。必ずしもドイツ語に対してではなくとも、ことばに興味を持っている人(おそらくこの雑誌の読者全員がそうであろうが)には、ぜひとも一度試食してみることを勧めたい。

提灯記事でなく、書評なのだから、よいことばかり書くわけにはいかない。苦言も呈しておきたい。

誤植はふつう完全には避け得ないものだが、乙政の初版にはかなり目立っていた。例えば11頁の母音音素の一覧では/ɔ/となるべきところに/ŋ/とある。もっとも第二版ではほとんど修正されている。他に、音声標記では、印刷の都合か、国際音声字母(IPA)とは違った文字がいくつか使われている。また、言語学の術語の多くは翻訳語であるためこれもしかたない面があるが、用語上の注意が必要と思われる箇所がある。一例を挙げれば、意味論で「外延的意味」、「内包的意味」がそれぞれ「明示的意味」、「暗示的意味」と同じものとされているが、「外延」「内包」は論理学や形式意味論において通例それぞれ指示物の集合、集合を規定する特性と理解されている。このことについての言及がないと読者の側で混乱が起きかねない。また、わかりにくかったり、不適切と思われる記述も若干なが

から見られる。意味論で Sinn と Bedeutung の違いに言及されているが、通常理解とは逆になっている。56 頁設問 39 はその差の判断がつかねるし、18 頁の Haus の複数形 Häuser の形態素の類別には前後で矛盾がある。最後のものは第二版で修正されている。本書を利用する場合は第二版によるべきである。

吉田他では理論的背景をもった表現が説明抜きで登場したり、説明不足で分かりにくい箇所が散見される。例えば 11 頁の「それらが学習可能であるという意味では」という文は生成文法の枠組みにおいて言語習得がもつ理論的背景を知らないとう理解が難しいし、43 頁「素性は消去され、この構造は適格になる」もひとこと説明がほしいところである。なお誤解の余地もない明らかなケアレスミスだが、92 頁(59)b と c の CHILD は BOOK でなければならない。

両書の練習問題を見ているうちに評者も一つ作ってみたくなくなった。材料は吉田他の 70 頁から拝借する：

課題

次の文には 2 とおりの読み方(解釈)がある。それを説明し、かつどちらの読み方がより適切であるかを判断しなさい。(答えは下)

(7) の命題は、文の内包、つまり (7) を満たす状況・世界の集合として把握できる。

解答例：「つまり」によって並置されるものの範囲として、「(7)」と「(7) を満たす状況・世界の集合」の 2 つの可能性がある。すなわち「文の内包=(7)」と「文の内包=(7) を満たす状況・世界の集合」という 2 つの読みが可能である。適切な読み方は前者である。なぜなら、内包の概念は、その命題が表す事態の特性=条件を示すものであり、後者の解釈を採るとその条件を満たすものの集合となってしまう、こちらは外延にあたるからである。この曖昧さを避けるためには、「(7)」の後にコンマをおく、あるいは「つまり(7)」をカッコでくくるとよい。